

1.1. 鶏大腸菌症多発のブロイラー養鶏場における 伝染性ファブリキウス嚢病ウイルスワクチンプログラムの検討

玖珠家畜保健衛生所 大分家畜保健衛生所¹⁾

○佐藤愛、人見小百合、松井英徳、松岡恭二
病鑑 坂田真友子¹⁾

【はじめに】鶏の伝染性ファブリキウス嚢病（以下IBD）は免疫抑制による他病の誘発、ワクチン不応答の原因になる。2010年5月13日に、H市の100千羽を飼養するブロイラー養鶏場において、ワクチン接種後に呼吸器症状、脚弱、腸炎が認められたため、病性鑑定を行い鶏大腸菌症及びサルモネラ症と診断した。その過程でIBDウイルス（以下IBDV）遺伝子を検出したため、IBDVの抗体検査を実施し、ワクチン接種適期の検討を行ったところ、死亡率が減少したので報告する。

【病性鑑定】剖検所見では、脾腫・気嚢の混濁肥厚が見られ、盲腸内容からコクシジウム20,000PG以上検出(3/3)。ウイルス学的検査ではPCR法により、ファブリキウス嚢（以下F嚢）からIBDV遺伝子検出(4/4)、IBDV分離陰性。遺伝子解析により野外株と判定。発症鶏群と隣接鶏群のペア血清47検体を用いてIBDV中和試験を行った結果、解剖鶏7羽(512~4096 \leq)及び同居鶏(1024~4096 \leq)は発症時から高い抗体価を示し、隣接鶏群は発症2週間後に幾何平均(GM)値9.8から2048まで上昇した。細菌学的検査では大腸菌を分離(7/7)。肺から*Salmonella* Schwarzengrundを分離(2/7)。病理学的検査では肝臓に多発性巣状壊死、脾臓のリンパ濾胞の変性壊死、化膿性心外膜炎、化膿性気管支肺炎(3/4)、気管炎が認められた(3/3)。以上から、「鶏大腸菌症及びサルモネラ症」と診断。

【ワクチンプログラムの検討】

1. 材料及び方法：6月28日から10月25日に採材した鶏血清209検体を用いて、IBDV中和試験及びNDV赤血球凝集抑制（以下HI）試験を実施した。
2. ワクチン変更前の成績：IBDVに対する移行抗体は非常に高く（GM値2048）、20日齢まで抗体が下がり（GM値64）、36日齢には上昇が認められた。
3. 検討したワクチンプログラム：（変更前）0日齢にコクシジウム、14、21日齢にIBDとNDを接種。（変更後）0日齢にコクシジウム、14、28日齢にNDを、21日齢にIBDを接種。

【結果および考察】2週齢からの死亡率の上昇の原因としてワクチンプログラムが適切でないことが考えられた農場において、ワクチンプログラムの検討、見直しを行った結果、死亡率が低下した。変更後も、死亡鶏において病性鑑定を行ったがIBDVは検出されなかった。病性鑑定の途中で検出されたIBDVは死亡率の上昇には関与しなかったと考えられる。今後は移行抗体の状態が大きく変更する可能性も考え、常時聞き取りを行い、生産性の向上のために寄与したい。